

九州大学耳鼻咽喉科学教室初代教授 久保猪之吉

—第2報 同門の語りにもみられる“医の倫理”—

丸山マサ美¹⁾、小宗 静男¹⁾、吉田 眞一¹⁾
副島 忠弘²⁾、末松 孝文²⁾、下川 元継³⁾¹⁾九州大学医学研究院, ²⁾九州大学医学部医学科, ³⁾九州大病院

平成23年9月5日、九州大学耳鼻咽喉科学図書館にて、門下生A氏のご子息は、“初代教授 久保猪之吉の医師像”については、九州大学医学部における“久保先生最終講義”に終結していると語る。

臨床において、そして研究において、久保猪之吉は、第1は「真理を追求すること」、第2は「患者さんに接する時は“惻隱の心”をおこすことだ」と述べていたと語る。久保猪之吉の医師像はこのように当時の医局員一人、一人の心に刻み込まれて、その人の医療になっており、四三会誌の私信によく記載されている。

久保猪之吉の『医の倫理・哲学』は、久保の医療と医科学で長年経てきた「歴史」にあり、後には「**医史学**」にも心を向けていた。久保猪之吉は、「医学の最先端の研究の萌芽はその各々の歴史にある」と言っており、その“一生懸命さ”は弟子・教室員の多くの心を受けつがれ、その成果の一つとして、日本では珍しい医学博物館“Kubo-Museum(昭和2年)”として、今に残る。このことでも久保猪之吉は、著名である。開学当初から、九州大学細菌学初代教授 小川政修とともに、久保猪之吉は、この九州大学で、医学研究のために「医史学」の大切さを、また医学博物館の大切さ・重要さを、そしてまた医学研究と臨床と医学教育の根幹の部分で大切なことを論じ、人々を啓蒙した。

久保猪之吉は、66歳(昭和14年11月12日)で死去。当時の住所は、東京・麻布・^{こうがい}筈町の自宅であった。聖路加病院の顧問であり、前の晩には出版する本の最終稿を終えて、それを出された後、急に亡くなられたようである。久保猪之吉は、それまで、当時世界的に唯一を誇っていた耳鼻咽喉科学の全書的なデンケル カラーの著書に並ぶ、『大日本耳鼻咽喉科学全書(36巻)』を全日本の耳鼻科学会の会員の方々を糾合して編集・出版した。当時としては、稀な事であり、後に出版した貴重な書として、『鼻科学(3巻)』博文館(明治42年12月)発行があり、臨床家に座右のものとして役に立った。

九州大学の前身の京都帝国大学福岡医科大学着任前は、勿論独塊出張前、東京大学岡田教室に在局中であるが、岡田和一郎先生、金杉英五郎先生、小此木信六郎先生、賀古鶴所先生などの与望を担い、『大日本耳鼻咽喉科学会』の設立を手伝い、また学会事務、会報発刊の準備など熱心に行い、その人柄と才を見込まれた。その時、久保猪之吉は助手の職位ではあったが、その熱心さと純粋さは、教室員の期待を感じさせ、「よき師」と「朋」との出会いとなった。この事は、『日本耳鼻学会誌(明治35年7月30日付)』所載の「任に就きて志を言う」の一文から、うかがい知る事ができる。

久保猪之吉の出自は、二本松丹羽藩の士族であり、出生の折は、藩上席郡書記で代々名家だったが、「戊辰の役」後は大変逼塞し、困苦欠乏の中でよき頑張りの逸話が残っている。

久保猪之吉は、短歌を読む「より江夫人」と結婚後、より江夫人の知り合いである正岡子規、高浜虚子とも関係が深く、後には句作も始め多くの俳人と親交を厚くした。勿論、落合直文との関係で佐々木信綱博士や服部躬治氏、尾上紫舟氏、菊池駒治氏、齋藤雄助氏との歌人との交遊も深く、また夏目漱石とも親交深く、後には俳句の中村草田男、日野草城、水原秋桜子など、また地元の俳人の橋本多佳子女史、竹下しづの女史、杉田久女史などともつながりを楽しんだ。「久保博士が俳句の道に進まれていることを喜んでいる」と虚子に言わしめている。また、大正元年に九州帝国大学フィルハーモニー演奏会で明治天皇奉悼歌を捧げたが、久保猪之吉は、この「天皇奉悼歌」を作歌し、精神科初代教授 榎保三郎が作曲した。

本研究は、平成23年度 科学研究費補助金(課題番号)23650563(研究題目)九州大学医学部における史料研究—新しい「医の倫理」教育方法論の構築—の一環である。